

幼保小の連携・接続に関する考察 —「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に視点をあてて—

奥村正彦

岐阜女子大学 文化創造学部

(2024年11月5日受理)

A Study on Cooperation and Connection between Kindergartens and Nursery Schools and Elementary Schools -Focusing on the Ideal Child's Growth by the End of Early Childhood-

Faculty of Cultural Development, Gifu Women's University

OKUMURA Masahiko

(Received November 5, 2024)

要 旨

平成29年に改訂された幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、3法令と表す）において、就学前までに育ってほしい姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」と表す）が示された。

「10の姿」が示されたことは、長年課題となっている幼保小の接続を図るうえで、効果があるのとらえることができるものの、定着しているといえるだろうか。幼稚園・保育園・幼保連携型認定こども園（以下、3園と表す）において、「10の姿」についてどのようにとらえ、どのように日常生活・遊びにおいて生かしているのかを園へのアンケートにより把握したうえで、乳幼児期における「10の姿」の生かし方の案を示し、幼保小の連携・接続の一助としたい。

キーワード：「10の姿」、幼保小の連携・接続、アプローチカリキュラム

1. はじめに

平成9・10年頃には、全国各地で、「小1プロブレム」が顕著になり、幼保小の連携・接続についての取組の必要性が高まった。平成10年改訂の小学校学習指導要領には、小1プロブレムの問題もふまえ、他校種との連携の必要性が記載された。

平成19年の学校教育法の改正がなされたことにより、幼稚園教育が小学校以降の基礎として位置づけられ、一層、幼保小の連携・接続性が強調された。

平成20年改訂の幼稚園教育要領・保育所保育指針には、幼保小の接続に関して相互に留意する旨が規定された。

平成22年11月に、文部科学省主導の幼児

期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議による「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（以下、平成22年の接続の在り方についての報告と表す）が出され、一層、幼保小の取組が促された。

こうした流れを受け、平成29年改訂の3法令には、幼児教育を行う施設として共有すべき事項の一つとして、「10の姿」が示された。「10の姿」は、同じく共有すべき事項の一つとして示された幼児教育において育みたい3つの資質・能力が育まれている幼児の卒園時に見られる具体的な姿を示したものである。

ともすれば、園それぞれに方針があり、それに基づき、保育・教育がなされることにより、小学校入学時の子どもの姿に、出身園による違いが生じていることを小学校に籍を長年置いた身として、感じ取っていた。

平成29年に、「10の姿」が示されたことにより、3園が「10の姿」をどうとらえ、日々の実践の中でどう生かしてきているのかをアンケートをもとに現状の取組を把握し、成果・課題を明確にするとともに、乳幼児期における「10の姿」の生かし方について案を示すことにより、乳幼児期に軸足（昨年度は小学校の取組を視点にあてた）をおいた幼保小の連携・接続の在り方について考察し、幼保小の連携・接続のより一層の進展の一助とした。

2. 「10の姿」の価値について

平成29年の3法令の改訂により、登場した「10の姿」は、以下のようなよさがあることがとらえることができる。

(1) 幼児教育としての共通性の具体化

3園の3歳以上児の育みたい資質・能力及

び「10の姿」が共通に示されたことにより、質の高い幼児教育を全国どこでも同じ水準で担保できるようになった。

(2) 卒園時の育ちの意識化

園での生活を通じ、3つの資質・能力が育ってきている子どもの就学前の姿を具体的に示したものである。到達目標ではないものの、どんな姿をめざすのか、方向が明確になったことで、以前より、個々の子どもの育ちをより意識するようになった。

(3) 幼保と小の育ちの連続性

「10の姿」が、幼児教育と小学校教育の共通言語として、子どもの育ちを幼児教育においても、小学校教育双方が意識することにより、育ちの連続性を図るうえで、効果が期待できる。

(4) アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムをつなぐ効果

平成22年の接続の在り方についての報告において、「接続カリキュラム」という言葉が初めて登場した。この報告を契機に、接続期の前期として、就学前の幼児が円滑に小学校の生活や学習へ適応できるようにするとともに、幼児期の学びが小学校の生活や学習で生かされてつながるように工夫されたカリキュラムをアプローチカリキュラムとされた。接続期の後期として、幼児期の育ちや学びをふまえて、小学校の授業を中心とした学習につなげるため、小学校入学後に実施されるカリキュラムをスタートカリキュラムとされた。これら2つのカリキュラムを作成するにあたり、「10の姿」はつながりをもたらすうえで、効果的である。

(5) 主体的・対話的で深い学びとの関連

小学校以上の学校教育においては、主体的・対話的で深い学びをすることが求められている。もともと、幼児教育においては、遊びによる主体的な活動における学びを重視してき

ている。遊びを通して、「こうしたい」「こうした方がよい」と仲間と伝え合ったり、協力したりしてより遊びを発展させている。

「10の姿」をみていくと、主体的・対話的・深い学びの姿が随所に記されている。

- ・自立心＝身近な環境に主体的に関わり、様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し……
- ・協同性＝友達とかかわる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて考えたり、工夫したり、協力したりし……
- ・思考力の芽ばえ＝友達のような考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す……

(6) 非認知能力と関連

AI技術が急速に進展するなど、変化の激しいこれからの社会で必要とされる「生きる力」を考えたとき、非認知能力が重要になると指摘されている。しかも、非認知能力は、幼児期に最も育まれることが研究で明らかになっている。岐阜女子大学紀要第51号「遊びや生活の中で非認知能力を育む在り方」の中で示したように、「10の姿」と非認知能力とは、関わりが大きい。

このように、「10の姿」の内容は、価値あるものととらえることができる。

3. アンケート調査の実施

「10の姿」を価値あるものととらえることができるが、幼児期の保育・教育に実際に携わる3園では、「10の姿」をどのようにとらえ、活用しているのかを、3園の園長21名（幼稚園8名、保育園8名、こども園5名・21園のうち2園が公立、19園が私立）の回答を得た。以下、回答の一部を記す。

(1) 「10の姿」は、小学校入学時の卒園児の具体的な姿として示されていますが、小学校との接続において、意味があると思われますか。

思う	18名
思わない	2名
わからない	1名

(2) 1についての理由をお聞かせください。〈意味があると思う理由〉

- ・「10の姿」は具体的な成長の理解や手がかかりになっていると思う。小学校就学のため力ではなく、各発達過程で一人一人の子どもたちの姿を見ながら、今伸びゆく力を育むためにどんな遊びが必要なのか、園内で「10の姿」をもとに話し合うことができている。将来的に子どものつけた力が円滑な接続につながると思う。
- ・幼児教育で大切にしてきた姿を、小学校教育で生かしてもらうため。(3名)
- ・教科学習が始まる小学校に向け、「10の姿」に向け、遊びの中でどんな姿をめざしていけばよいのかを明確にして保育できるため。
- ・「10の姿」が導入されたことで、小学校がゼロスタートでないことを理解できる機会となった。(要約)
- ・発達段階に応じた指導ができ、小学校につながるができる。
- ・小1プロブレム解消の手立ての一つとなるし、幼児期のゴールを小学校教員が学ぶことを通して、小学校入学後の指導・援助がより明確になる。(要約)
- ・園で行う活動が「10の姿」のどの姿とつながっているのかを保育者が認識しながら子どもたちと向き合ううえで、わかりやすい。
- ・幼保と小が共通の視点で、子どもの姿をみることができる。(3名)

- ・自園の育てたい子どもの姿と重なるため、意味がある。(要約 2名)
〈意味があると思わない理由〉
- ・小学校教員が「10の姿についての理解が十分できていないと考えられるため、小学校で生かされないのでは。(要約)
- ・幼保小の接続に関して取り組んでいるが、十分とは言えない現状から、「10の姿」が設けられても生かしきれないのではないか。(要約)
〈わからないとした理由〉
- ・小学校での学びの内容が理解できていないため。

(3) 「10の姿」を「全体計画」・「指導計画」(日案・週案・月案・期案・年案)に位置づけてみえますか。

位置づけている	8名
特に位置づけていない	13名

(4) (3) に、どのように「10の姿」を位置づけてみえますか。位置づけについて具体的にお教えてください。

- ・全体的な計画では、「小学校との連携」の欄に「10の姿」を取り入れている。また、本園では各年齢の園目標と関わらせた「10の姿を育む保育」の表を作り、年間計画や指導案に位置づけるようにしている。
- ・保護者に配布する週案の中で、本日の活動が「10の姿」のどれに紐づくかを可視化している。保育者が毎日の保育を情性で行うことのないよう、どのようなねらいをもって活動を展開していくのかを紐づけている。(一部省略)
- ・「10の姿」をもとに、5領域を意識した指導計画を作成している。(2名)
- ・「10の姿」を「健康、人間関係、環境、言葉、表現」として、5領域の視点を立て、予想される園児の活動と教師の援助活動等を位置づけた。

- ・全体的な計画に入れているが、形だけのものです。職員には浸透していない。
- ・年案・月案に位置付けている。

(3) において特に位置づけていないと回答した園は、(4) に以下のように記している。

- ・どんな場面でも、保育者の考え方で結びつけ、位置づけられると思う。就学に向けて自信がもてるようになってほしいと考え、その子に合った支援に努めている。(要約)
- ・5領域の中に意識して組み込んでいる。
- ・特に位置づけているのではなく、それぞれの園がもつ建学の精神や教育目標をもとに5領域のねらいに基づいて保育をしていくと、自然に「10」の姿の子どもに近づいていくというレベルで考え、保育をしている。
- (5) 「10」の姿を育むため、貴園では、何歳児から意識して取り組んでみえますか。(16名回答)

保育園・こども園	0歳児から	7名
	1歳児から	1名
	2歳児から	2名
	満3歳から	1名
	3歳児から	4名
幼稚園	5歳児から	1名

(6) 貴園での取組の時期についての考えをお聞かせください。

- ・0歳児から各年齢の年案・月案に「10の姿」のどの姿に当たるのかを記載し、年間を通して意識しながら取り組んでいる。(要約)
- ・保育園では、6年間というスパンを生かし、「10の姿」をめざし、各年齢段階で系統的・発展的な保育を実践することが大切であるととらえるため、0歳児から。
- ・幼稚園の満3歳児のクラスでも、「10の姿」は、その年齢に合った方法で、確実に力として育んでいける。(一部省略)
- ・3歳までは、他者を意識する以前に、自分自身(個)を意識する年齢であることから、

他者を理解したり、他者と協力したり、集団で何かに取り組むことが適していると考えしていない。教育活動のみならず、保育の中から「10の姿」に繋がる活動や取り組みはあると理解しているが、概ね3歳からで十分だと捉えている。

- ・特に年長児クラスで就学後を見据えた保育を行っている。例として、当番活動を行い、園の中で最年長時としての自覚につなげる。文字遊びを取り入れ、遊びの中でひらがなに触れるなど。(一部省略)
- ・どの段階で意識して指導しているのかを常に子どもの実態とともに把握に努めているが難しい。

(7) 指導要録(保育要録)を園児が入学する小学校に提出されますが、貴園では「10の姿」を意識して記入されていますか。

意識している 18名

- ・保育要録が「10の姿」を意識して記述がされていると、小学校までの指導のプロセスがわかり、子どもの様子が共有でき、小学校での指導に活かすことができる。
- ・幼児期の終わりの段階で一人一人芽生えている姿を記載し、小学校での教育につなげてもらえるようにしている。また、一人一人の「育ちを確実に伝えるためにその子の課題である面をあげ、具体的な援助方法も記載している。
- ・日常的に「10の姿」を意識して保育を行っているため、記述内容の多くは「10の姿」に関わっている。
- ・小学期での学びに生かしてもらいたいと思って記している。(2名)
- ・共通の視点からその子をみることで姿をとらえ、理解しやすいと思う。他の子どもと比べたり、発達基準に照らしたりするのではなく、その子の年度当初の姿からどのように変容してきたのか記入することで、そ

の子の背景が伝わり、情報共有することで、小学校教育が円滑に進むと思う。

- ・指導要録の形式が「10の姿」を加えたものになっている。小学校の先生との共通認識の視点ととらえているから。
- ・子ども園指導要録のひな型を使用しており、子どもたちの具体的な姿を書け、よい。
- ・「10の姿」から一つ選んで、それについてエピソードで書く様式にしているため、自ずと「10の姿」を意識することになる。(要約)

特に意識していない 3名

- ・園でのありのままの姿を伝えているため、特に意識して伝えることはしていない。

(8) 貴園ではアプローチカリキュラムを作成されていますか。作成されている場合、どのように作成されていますか。

(回答11名)

作成している 5名

- ・年長児4月から3月まで、幼児期から児童期への接続を意識し、遊びの中で培うことのできる内容を記載している。(要約)

・4月から3月まで(内容省略) 2名

・9月から3月まで(内容省略) 2名

作成していない 6名(2園作成中)

(9) 幼保小の連携・接続については、平成22年から実施することを国・県・市町から勧められてきましたが、全体的にみると、10年以上経過しても、交流は進んだものの、接続には課題があるとも指摘されています。そうした中で、令和4年度から3年間にわたり、モデル地域でのアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの内容の充実、教育方法の改善の推進が図られています。幼保小の接続についての考えをお聞かせください。

- ・本園では接続について取り組んだが、入学する小学校によって、接続の在り方に差異

がある。園児がどの小学校に入学しても、充実した接続が図られるとよい。(要約)

- ・接続においては、幼保こ小がお互いに教育・保育について理解したうえで、共通の認識のもと接続について取り組んでいく必要があると思う。まずは、それぞれの職員の交流しやすい関係を築き、対話を増やしていくことで取り組みに対するハードルが下がるのではないかなと思う。
- ・カリキュラムだけを充実させても現場でそれが活かされているかは疑問もある。カリキュラムを共通言語に、しっかりと子どもの育ちをつなげられるものにしていくには、一人一人の教員の資質や考えが大きく影響されるため、現場を知る、考える、語り合う等の交流がまだ必要だと考える。
- ・幼保小の連携・接続において一番大切なことは、相互にリスペクトと信頼があるかなと思う。本園では小学校と良好な関係性の中で連携を行っており、相互に授業参観があり、教諭同士の交流会も行っている。私立であるが、卒園する園児の大半が公立小学校に入学するのであれば、公教育についていけない子どもに育てることはいけないと思う。アプローチカリキュラムの作成はスタートカリキュラムに合致させる必要もあること、どの小学校においても一定のレベルで取り組まれる前提が必要である。

(一部省略)

- ・実際に幼稚園訪問をしていただく前は、幼稚園の保育のイメージがかなり低かったようで、実際に見ていただいてからの懇談は、話だけの連携より意義があるように思う。(要約)
- ・小学校の先生方に園での子どもの実際の姿をもってもらうことがまず大切。(要約)
- ・アプローチカリキュラムは作成してあるが、基本的にはこれまで通りの幼児教育を

実践している。給食指導については、年長の3学期から、小学校と同じような配膳方法にして、小学校に就学した後、戸惑わないように配慮している。小学校も、幼稚園での保育補助の体験を生かし、入学当初は教室に遊びのコーナーを設置して、自由に遊ぶことのできる環境を整え、児童がとまどわないように配慮していただいている。

- ・アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムをそれぞれ作成しているものの、しっかりと接続を意識したものになっているかは疑問。特に近隣小学校と意見を交わし、共通認識の下で、子どもたちと関わっていく必要があると思う。
- ・本園でも卒園児が10以上の小学校へ進学する。そのすべての小学校と連携・接続は難しい状態である。現状としては、園所在地の小学校1校との交流、気になる子の申し送り程度になってしまっている。その交流も十分ではない。それぞれの組織のアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムを持ち寄り、検討する場を設けてもよいかなと思う。
- ・幼保こ小の連携及び接続のキーワードは、「むりなく むだなく むらなく」であるととらえる。昨今の働き方改革の流れも鑑みたと、限りある時間の中でより効果的な連携及び接続の在り方を考慮する必要がある。
- ・お互いの保育・教育についての理解がまず大事だと思う。幼は幼、保は保、こはこ、小は小と、どれもが自分がやっていることが正しいという意識が根強く残っていることが残念である。(要約)
- ・園長が小中教員経験者である場合、卒園後の子どもの姿がよくわかり、連携・接続は強く意識していると思われる。園によっては、園児獲得が厳しくなる中、特色を出す

ことに力が入りすぎ、「10の姿」を育むことが十分にできるのか心配な側面もある。

(要約)

(10) 幼保小の接続のためには、今後どのようなになされることが望ましいと思われますか。考えをお聞かせください。

- ・ 小学校の先生方にも保育園に足を運んでいただける機会を設けたい。(2名)
- ・ 交流はよく行われてきており、よいと思う。しかし、保育士と教師との話し合いはほとんど行われておらず、保育の現場や教育の現場が深められていない。保育士や教師の交流が必要だと思う。(要約)
- ・ 小学校との接続だけでなく、幼保この就学に向かう姿も足並みをそろえていくことが大事だと思う。
- ・ スタートカリキュラムに記載してあるものの具体的な姿や小学校側の思いを話し合える機会を充実させ、連携を深めたい。
- ・ 幼保こ小の垣根がなくなり、実際の子どものすがたを見ながら(知って)話し合いができる関係づくりが重要だと思う。また、年間を見通した計画を作成し、常に無理なく、取り組めるような改善を加えながら、誰が担任になっても接続のための取り組みが同じように行える体制づくりができるとよいと思う。(要約)
- ・ 卒園児のほとんどが公立小学校に入学する以上、入学後の姿を保証できる幼稚園教育、生活の必要があると思う。(要約)
- ・ 接続を密にし、相互理解を深めるためには担任をする先生が交流する機会を増やすことが重要である。実現できるためのバックアップが必要(同様意見 5名)
- ・ 幼稚園訪問での実際の保育での園児や職員の姿を参観していただいての懇談が必要である。(要約)
- ・ ア 幼保こ小の校種間による積極的な人事

交流(半年から1年間という長いスパンで校種間の人事交流を行えば、連携や接続がより強固なものになる) イ 幼保こ小による互いを理解する研修会の実施(幼稚園・保育園の職員には、小学校学習指導要領について研修する機会を位置付ける) ウ 日常的な交流・連携、接続の推進(既存の小学校の参観参観の際に3園に案内を出したり、園内研修の時に小学校の職員が参加したりするなど)(要約)

4. アンケートの考察

「10の姿」は、保育・教育のねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている子どもの小学校就学時の具体的な姿であり、指導を行う際に考慮するものであると示されているものの、「10の姿」は達成目標でなく、方向目標であるとされている。こうしたことから、指導計画に「10の姿」との関連を明記していない園が21園中13園と6割を占める。週案や日案に「10の姿」との関連を明確に位置付けている園は1園のみである。

上記の結果から、法令に示されたねらい・内容をふまえた活動を日々していくことと「10の姿」を意識してつなぐことを意図的に取り組んでいない園が多いことがわかる。

卒園時に望ましい姿として「10の姿」を明記されたことは、子どもの活動が「10の姿」とどうつながりがあるのかを入園時から保育者が意識する習慣をつけることが必要であるととらえる。計画段階での環境設定、活動時の子どもへの言葉かけ、活動後の子どもの発言・行動の分析から、「10の姿」との関連を意識することは、子どもの育ちを保障し、小学校教育のスムーズな展開につなぐうえでも、必要であるととらえる。

「10の姿」に記載された内容からは、保育者にとって、いつの時点で、どのあたりまで育つとよいのかはわからない。法令に示されている保育・教育のねらい及び内容をみても、各年齢で、どの程度まで育つとよいのかまでは明確でない。一人一人の成長の足取りの違いを十分ふまえたうえで、それぞれの年齢で「10の姿」を具体的に意識できるものがあると、保育者にとっては、参考になるのではない。

小学校・中学校・高等学校では、学習指導要領に記載された内容を逸脱したり、扱わなかったりすると、問題視される。一方、3園においては、示された要領・指針があるものも、園の保育・教育内容については、違いが大きい。その違いこそが、園の独自性・特色として、保護者の園選択の基準となっている側面が大きいと言える。

一方では、幼児教育の重要性から、平成29年の要領・指針の改正での園に求められる共通性の面からみたとき、小学校就学前の保育者は、法令を遵守する立場から、「10の姿」についてのとらえ・せまり方について、今一度振り返りたいものである。

小学校就学前のそれぞれの年齢で、遊び・生活の中で育まれる子どもの姿を「10の姿」からみていき、小学校に送る要録にも、一人一人の「10の姿」と関連づけて記載することが、小学校入学後の一人一人への適切な関わりにつながり、生きるのではない。

(9)・(10)についての意見では、幼保小の連携・接続の現状が理解できる。いきなり、幼保小の効果的な接続を考えることはできない。平成22年の接続の在り方についての報告において示されている連携から接続へと発展するステップ(0~4)を着実に進めていく地道な営みが必要であることを改めて痛感する。

意見で述べられている子ども同士の交流、職員同士の交流、保育場面・授業場面の参観、お互いの保育・教育を理解したうえでの作成したアプローチカリキュラム・スタートカリキュラムについての話し合い等どれも経なければならぬ重要なことであるにとらえる(岐阜女子大学紀要第53号を参考にされたい)。

限られた時間の中で、教育委員会の支援を得ながら、園長・校長の共通理解のもと、確かな接続につなぐ交流・実践の積み重ねを期待したい。

5. 「10の姿」の生かし方

ここでは、3園が、卒園する時点で育みたい3つの資質・能力が、一人一人の子どもの姿として示されることを願い、保育者は、子どもたちの遊び・生活の中で、入園時から「10の姿」を意識していくことが幼保小の接続のうえで重要であるのととらえから、「10の姿」の生かし方に焦点をあて、案を示すこととする。

「10の姿」の記載内容に目を通すだけでは、幼児期の終わりまでの姿に育つ道筋はわからない。そこで、経験の浅い保育者であっても、わかるような道筋を示すようにしたいと考えた。道筋を示すにあたっては、次の2点を関連化させた。

- ・乳幼児期の発達過程(平成20年保育所保育指針解説書には、子どものおおむね6か月未満からおおむね6歳までの発達過程がp38-54にわかりやすく記載されている)
- ・3法令に示されている保育・教育のねらい及び内容

以下に示すものは、あくまでめやすであり、計画段階及び子どもの姿の振り返りの中で活用できるもので、無理にどの子にも到達させるものではないこと、一つ一つを取りあげて

保育にあたるのではなく、活動を通して、関連的にみていく必要があることを確認しておく。

全体計画・指導計画作成時、参考にしていただけでは幸いである。

「10の姿」の年齢ごとの育ってほしい姿

ア 健康な心と体

- 0歳児…保育士の愛情豊かな受容のもとで、心地よく生活する。
- 1歳児…保育士の愛情豊かな受容のもとで、生活のリズムが形成され、安定感をもって生活する。
- 2歳児…身の回りを清潔に保つ心地よさを感じ、その習慣が少しずつ身に付ける。
- 3歳児…生活に必要な基本的な生活習慣を身に付ける。
- 4歳児…見通しをもって生活する。
- 5歳児…自ら健康で安全な生活を作り出す。

イ 自立心

- 0歳児…保育士とのやりとりを楽しむ。
- 1歳児…着脱などを自分でしようとする。
- 2歳児…「ジブンデ」「イヤ」と自己主張する。
- 3歳児…自分でできることは自分でする。
- 4歳児…いろいろなことに挑戦し、やりとげようとする。
- 5歳児…しなければならないことを自覚し、前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わう。

ウ 協同性

- 0歳児…保育士の支えで、自分の欲求を満たす。
- 1歳児…自分の意思を保育士に伝え、自己確立の芽生えを育む。

2歳児…保育士や周囲の子どもと模倣遊びやごっこ遊びをする。

3歳児…友だちと遊ぶことを楽しむ。

4歳児…自分の思ったことを伝え、相手の思っていることに気付く。

5歳児…仲間と活動することの楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができる。

エ 道徳性・規範意識の芽生え

- 0歳児…保育士との関わりの中で、信頼感をもつ。
- 1歳児…周りのこどもの泣く姿から、叩いたり、噛んだりすることはいけないこととを感じるようになる。
- 2歳児…周りの子とトラブルを起こしたら、保育士に訴え、善悪の判断を求める。
- 3歳児…よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら生活する。
- 4歳児…きまりを守る大切さがわかり、自分の気持ちを調整する力が育つ。
- 5歳児…友達と折り合いをつけながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

オ 社会生活との関わり

- 0歳児…身近な人と過ごす喜びを感じる。
- 1歳児…玩具など、保育士の援助で、貸したり、一緒に遊んだりする。
- 2歳児…自分を認識し、家族や周囲の人に興味をもつ。
- 3歳児…相手の気持ちを考えてかかわろうとするようになる。
- 4歳児…地域の身近な人と触れ合う中で、人とのさまざまな関わり方に気付く。
- 5歳児…公共の施設を大切に利用する等して、社会とのつながりを意識するようになる。

カ 思考力の芽生え

- 0歳児…身の回りのものに興味や関心をもつ。
- 1歳児…見る, 触れる, 探索するなど, 身近な環境に自分から関わろうとする。
- 2歳児…様々なものに関わる中で発見を楽しんだり, 考えたりしようとする。
- 3歳児…生活の中で, 様々なものに触れ, その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- 4歳児…身近な事象に積極的に関わり, 自分なりに比べたり, 関連づけたりしながら考えたり, 工夫したりする。
- 5歳児…他の子の考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい, 自分の考えをよりよいものにしようとする。

キ 自然との関わり・生命尊重

- 0歳児…感じとったものを保育士と一緒に味わう。
- 1歳児…小動物や植物に興味をもつ。
- 2歳児…身近な動植物を観察し, 「これなに?」「どうして?」と盛んに質問する。
- 3歳児…自然に触れて, 自然の変化を感じ取り, 自然の事象への関心が高まる。
- 4歳児…自然のさまざまな事象に関心もち, 取り入れて遊ぶ。
- 5歳児…身近な動植物に親しみをもって接し, 生命の尊さに気付き, いたわったり, 大切にしたりする。

ク 数量や図形, 標識や文字などへの関心・感覚

- 0歳児…生活や遊びの中で, さまざまなものに触れ, 関心をもつ。

1歳児…積み木や車を横に並べて遊ぶ。

2歳児…積み木やブロックを組み立てて遊ぶ。

3歳児…日常生活の中で, 数や量, 数量や図形などに関心をもつ。

4歳児…日常生活の中で, 簡単な標識や文字などに関心をもつ。

5歳児…日常生活の中で, 数量や図形, 標識, 文字などを必要感に基づき, 活用し, 興味や関心, 感覚をもつようになる。

ケ 言葉による伝え合い

0歳児…保育士による語りかけ, 発声や喃語等への応答を通じて, 言葉の理解ができる。

1歳児…保育者に絵本を読んでもらうことを喜ぶ。

2歳児…言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

3歳児…したいこと, してほしいことを言葉で表現したり, わからないことを尋ねたりする。

4歳児…人の話を注意して聞き, 相手にわかるように話す。

5歳児…思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい, 文字に対する興味や関心をもつようにする。

コ 豊かな感性や表現

0歳児…保育士のあやし遊びに機嫌よく応じたり, 歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。

1歳児…音楽, リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。

2歳児…歌を歌ったり, 簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。

3歳児…感じたこと, 考えたことなどを音や動きなどで表現したり, 自由に

かいたり, つくったりなどする。

4歳児…かいたり, つくったりすることを
楽しみ, 遊びに使ったり, 飾つた
りなどする。

5歳児…自分のイメージや動きを言葉など
で表現したり, 演じて遊んだりす
るなどの楽しさを味わう。

参考文献

- 1) 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携
型認定こども園教育・保育要領〈原本〉(平
成29年告示) チャイルド社
- 2) 保育所保育指針解説 平成30年3月 厚生労
働省編 フレーベル館
- 3) 保育所保育指針解説書 平成20年7月 厚生
労働省編 フレーベル館
- 4) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在
り方(報告) 平成22年11月11日 幼児期の

教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関
する調査研究協力者会議

- 5) 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての
手引き(初版) 令和4年3月31日 文部科
学省
- 6) 無藤隆[編著] 幼児期の終わりまでに育つ
てほしい10の姿 東洋館出版社 P18-25,
30-37
- 7) 木下光二 遊びと学びをつなぐ チャイルド
本社 p28-39
- 8) 遊びや生活のなかで10の姿を育む保育 公
益財団法人 幼少年教育研究所 編著 チャ
イルド本社 p8-19
- 9) 奥村正彦 岐阜女子大学紀要第51号 遊び
や生活の中で非認知能力を育む在り方 p65
-69
- 10) 奥村正彦 岐阜女子大学紀要第53号幼保小
の連携・接続に関する考察—小学校の取組に
視点をあてて— p30-34

